

「CCCカレッジ」体験レポート

貿易学科3年 三 橋 康 弘

2005年12月17日に東京・広尾にある聖心女子大学においてCCCカレッジが開催され、合計34名の大学生、社会人の方々が参加した。

CCCカレッジとは、「シチズンシップ・コラボレーション・カレッジ（地球市民共生講座）」の略称である。CCCカレッジはこれからのより良い社会・望ましい未来の創造に向けて、「国際理解・協力」「地球環境」「多文化理解」「地域共生」といった私たちを取り巻くさまざまな課題を共有し、共に考え、共に学んでゆく参加型学習プログラムである。1998年から始まり、今回で23回目を迎える。運営の主体は、NPO・大学・企業の協働（パートナーシップ）となっている。今回は、実際にこのCCCカレッジに参加し、感じたことを文章を通して伝えていきたいと思う。

今回のCCCカレッジは、『あたりまえって何だろう？』をメインテーマにしている。私たちの日常

の生活では、「蛇口をひねれば水が出る」、「お腹が空いたら何かを買う」という行為が私たちにとって、あたりまえになっている。しかし、世界の視点で見たときに、このようなことは、あたりまえなのだろうか。それを考えるのが今回のCCCカレッジの目的である。

CCCカレッジは主に2つのプログラムで構成されている。1つ目は、身近なコンピ二を通じて、国際問題を知ろう、というものだ。これは参加者が7つのグループに分かれ、与えられた課題に沿って、書籍やインターネットを用い調べて発表するグループワークである。私たちのグループでは「コーヒーにおける国際問題について調査した。インターネットで調べたところ、「フェアトレード」というキーワードにたどり着いた。フェアトレードとは、途上国の商品を適正価格で仕入れ、販売する仕組みである。私たちが調べた「コーヒー」を例にして簡単

に説明すると、「コーヒーの生産量が急激に増えたために、価格が下落し、途上国のコーヒー農家の収入が減少した。そこで、農家よりコーヒーを適正価格で仕入れることで、コーヒー農家を保護することが出来た。また、従来のコーヒー栽培では

大量の農薬を使用していたために、人体や自然環境に悪影響を与えていた。そこで、コーヒー農家にオーガニック製法を指導することにより、人と自然環境にやさしいコーヒーを栽培することが可能になった。つまり、単にコーヒーを農家から適正価格で仕入れるだけでなく、コーヒーの品質向上と自然環境への配慮という効果も生み出している。そして、ついにグループ発表の時間がやってきた。グループ発表には審査員がいるため、私はとても緊張した。だが、今振り返ると思うていたよりも的確に発表することが出来たと思う。発表後には、ある審査員の方が、個性的で分かりやすい

プレゼンテーションでした」と言ってくれた。その時はとてもうれしかった。

2つ目は、市民団体が環境問題対策に取り組む秋元智子さんと、実際にフェアトレード商品を販売している中森あゆみさんによる講演が行われた。秋元さんは中国で進行している砂漠化や森林伐採、絶滅しつつある動物について紹介していた。その中で秋元さんは、環境問題は会議室ではなく、現場で起きている」と話していたことが印象に残る。「現場」というのは、自然破壊により環境が悪化している現場」のことである。つまり、私たちは環境を守ろうという意識はあっても、実際に行動を起こす人は少ないということを指している。実際に、森林ボランティアに参加している日本人は1000人に1人だというデータがあるほどだ。秋元さんは、環境問題に対し、実際に行動することが重要である」と講演の終盤で語っていた。一方、中森さんはフェアトレードについて詳しく紹介していた。中森さんは刺繍カーペットのフェアトレード商品を扱っている。この商品は、新しい技術を用いるのではなく、昔から受け継がれてきた既存の技術を用いている。ではなぜフェアトレードが必要なのか。このカーペットを作っているのは

途上国の女性たちなのだが、彼女らは先進国に比べ収入の機会が少ない。仮に夫が亡くなったり、離婚したりすると収入源を失ってしまう。

そこでフェアトレードを用いることにより、彼女らに収入の機会を提供している。話の途中、中森さんは、彼女たちが作った商品を「かわいそう」、「貧しいから買ってあげよう」というような同情する気持ちで買ってもうってはいけません。彼女らには売れるものをきちり作っていただいています。心から欲しいと思う商品でなければ、フェアトレードの意味がありません」と語っていた。フェアトレード商品は、決して同情して買うものではなく、普通の商品と同じように欲しいと思うたら買うのが良いのである。お互いが公平な気持ちを持つことが大事なのである。

そしてCCCカレッジの最後には、参加者が今日学んだことをカードに一言でまとめ、それをクリスマスツリーに吊るした。私は、素直に『欲しい』と思ったフェアトレード商品を買ってみる」とハート型のカードに記した。CCCカレッジを通じて環境問題、フェアトレードについてより深く学ぶことが出来たと思う。

今回のCCCカレッジは、身近な商品を通じて国

際問題を考えるという難しいものであったが、その分得るものは多かった。また、参加していて新たな疑問が出てきた。それは、実際に売られているフェアトレード商品が、他の商品に比べ割高であることだ。100円ショップ等の割安な商品を提供する店が多い中で、フェアトレード商品が市民に浸透するかどうかは不透明である。今後は、フェアトレード商品をいかにして普及させていくのが大事だと思う。そのためにフェアトレード商品を知ってもらうキャンペーンを展開したり、特典を設けたりする

努力が必要とされるだろう。国際問題、環境問題は今そこに起きている。私たちはその問題を知り、一人でも多くの学生が動き出すことを願う。



参加者の思いを込めたクリスマスツリー



グループ発表に望む筆者